

猪狩誠也教授退任記念号の発刊に寄せて

猪狩誠也教授は、1995年のコミュニケーション学部創設とともに本学に赴任され、コミュニケーション学部における新しい教育・研究の創成に多大な努力を傾注された。また、その後の大学院コミュニケーション学研究科の開設にあたって、中心的役割を果たされた。この間、コミュニケーション学部長、広報委員長をはじめ学内の要職を歴任されるなど、現在のコミュニケーション学部、コミュニケーション学研究科の基礎をつくるうえで、猪狩教授の功績は非常に大きなものがある。

猪狩教授のご専門は、広報論、パブリック・リレーションズである。広報活動、パブリック・リレーションズ活動の重要性が認識されたのは、日本においては比較的新しいことで、戦後になってからである。そのため広報論やパブリック・リレーションズの研究が本格化したのも、新しい。そのなかでも、猪狩教授は、広報論の研究に早くから取り組まれた先駆者の一人である。

猪狩教授は、もともと経済雑誌ダイヤモンド社の編集者として出発されたが、経済関係書の企画編集にあたるうちに、当時、主にアメリカから導入されたパブリック・コミュニケーション論に注目し、その研究に取り組むようになったと聞いている。また、故南博一橋大学名誉教授が主催されていた社会心理研究所の研究会等に参加され、共同研究の成果を発表された。その後、現代広報研究所長として主に企業広報の研究を進められてこられた。猪狩教授の広報研究は、ご自身の実務経験に裏打ちされているところに大きな特徴があり、具体的な事例をあげた分かりやすい説明は説得力がある。

学部学生、大学院生に対する教育においても、温かなお人柄そのままに常に優しく学生と接しておられた。いつか、ゼミ学生から先生を模した人形をプレゼントされたと大喜びされていたが、こうしたエピソードも先生の人柄をよく示しているだろう。猪狩ゼミからは、多くの卒業生が社会に飛躍し、様々な分野で活躍されている。

猪狩教授は、学内においても学外においても、人に接する際には常にまじめで温かな態度をとられることは誰もが認めるところである。それは、決して事を荒立てることない先生のご性格もあろうが、それだけではなく、企業と社会が温かな関係をつくることを主眼とする先生の広報論を日常的に実践しておられるようにも感じられる。

猪狩教授が退任されることは、我々にとって大変残念ではあるが、先生がより自由な時間

猪狩誠也教授退任記念号の発刊に寄せて

をお持ちなって、ますますお元気で、広報論・パブリック・リレーションズのご研究を発展
されることを祈念してやまない。

2005年1月

大学院コミュニケーション学研究科委員長 有山 輝雄